

---

# SNOW - side B -

夢宮架音

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

S N O W - s i d e B -

### 【コード】

N O 8 0 2 I

### 【作者名】

夢宮架音

### 【あらすじ】

雪にまつわる短いお話。side Aと対になっています。

はらはらはらはら...

大きな白い花のような雪が、音もなく降り積もる。  
灰色の空は雪が止む様子を見せない。

涼は雪が嫌いだった。

寒いし。

足元はぐちゃぐちゃになるし。

滑るし。

雪が降っているだけで外に出るのが嫌になる。

雪が好きだと言っている奴の気が知れない。

良いことなんか一つもない。

ずっとそう思っていた。

雪が降り積もる中、一人の少女がたたずんでいた。

感情をうかがわせない表情で、雪の降り積もる様をじっと見つめていた。

その姿は素直に綺麗だと思う。

ふと思う。

あの少女は雪のようだと。

綺麗なくせに自分の容姿に無自覚で。

素でいるときには、他人を突き放す冷たい言葉を吐く。

そのくせあの少女の持つ心は驚くほど繊細で、脆いものだった。

他人の何気ない言葉に傷つき、時には自分で吐いた言葉にさえ傷つく。

守ってやりたいと思った。

何にも傷つくことがないように。

彼女が笑っていられるように。

「浅葱」

名前を呼べば、少女はすぐに振り返る。

「何してんだ。風邪引くぞ」

歩み寄ってその首にマフラーを巻く。

するといつもは無表情なその顔に、どこか嬉しそうに微かに笑みを浮かべる。

満開のとまではいかないが、時折にしか見せないその笑顔に頬が緩む。

「ほら、行くぞ」

そういつて手を差し出してみる。

「…恥ずかしい奴」

少女が冷たく言い返す。

この美しい少女が素直でないことは十分に承知している。

それでもやっぱり少しムツとする。

自分の表情を読み取ったのか、少女の表情が一瞬だけ微かに曇る。

「行くぞ」

ぶつきらばつに言つて、少女は自分の横をすり抜ける。

自分を置いてさっさと歩き出す。

少女が素直でないことも、好意を示すことに慣れていないのもわかつてはいるが、やはり冷たい態度を取られると淋しいのも事実だ。思わず一つため息をつく。

涼は何も言わずに少女に歩み寄る。

雪の中で背を向ける少女はいつもより細く、頼りなく見えた。

そんな少女を守ってやりたくて、涼はいつもよりも近い位置で少女に並ぶ。

なんだかんだ言つても、涼はこの少女が大切なのだ。

ふと、手のひらに冷たいものが触れた。

見ると少女が自分の手を握っていた。

半分以上顔をマフラーに埋めて、恥ずかしそうに頬を染めていた。たったそれだけのことに、胸が温かくなる。

「寒いだけだ」

そっぽを向いて少女は無表情に言う。

「わかつてるよ」

涼は雪が嫌いだ。雪なんか降っても良いことはない。

でも今だけはこの雪が降り続ければいいと思う。

いつもはそっけないこの少女が、雪の冷たさを理由にして自分を求めてくれる。

だからもっと、今だけは雪が降り続ければいいと思う。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0802i/>

---

SNOW - side B -

2010年12月5日14時58分発行